

幼児の文字獲得と文字指導に関する考察

天野 珠子

Toward the Acquisition of kana-Letters by Pre-school Children

Tamako Amano

I はじめに

幼児が文字に対し興味・関心を示し、実際に読み・書きを始める年齢の平均は年々早まってきている。最近では、2才代ですでに文字に関心を示す幼児も出てきている。全体としては、4才代がピークで、5才児で平仮名の一字も読めない子を探す方が難しい。又、小学校側でも原則としては、初歩から指導するカリキュラムとなっているが、実際には入学式の翌日、次の日の持ち物や親への伝言を連絡帳に書かす教師もめずらしくないという。現教育法では、読み・書きの指導は就学後となっているが、ほとんどの子どもがすでに読み・書きを開始している現状では、小学校側にとっても対応が難しいことであろう。

一方、現行の幼稚園教育要領や保育所保育指針においては、ことばへの興味・関心を豊かに育てることが目標となっているが、これはあくまでも“はなしことば”のことである。平成2年度に改訂される新教育要領においても、文字は数と共に自然な形で経験の中から獲得されることが望ましいとしている。従って園側は独自の判断により、子どもへの対応をせねばならない。園や保育者の認識も又、他の指導と比べて数・文字の扱いにはかなりの差が出て来ているのが実情である。それだけではなく、今や識者、両親など、保育に直接・間接に関係する人々の間にも、意識の差は広がってきているといえよう。本音とたてまえ、つまり幼児の実態と指導目標とのズレは、現場の保育者と幼児を持つ母親に一番の齟齬がきているといえよう。

このような現状において、保育者予備軍といえる保育科の学生はどのような意識を持っているのであろうか。筆者は乳幼児心理学の講義の中で、言語発達に関する内容を、数年前までは話しことばの発達についてのみ行ってきた。しかし近年、幼児の読み・書きにおける加速

現象を見る時、文字獲得の実態と指導者として必要な平仮名文字に対する知識を講義の中に導入することにした。ただし、あくまでも筆者自身の個人的見解は加えず、一般論として紹介してきたつもりである。今回、学生の意識・実態調査を実施することにより、筆者の研究課題である「文字指導の系統制と教材開発研究」の参考としたいため本調査を実施することにした。

II 目 的

1. 平仮名の文字獲得がほとんど幼児期になされるとしたら、その指導は誰がどのような方法で行うことが望ましいと学生達（将来保育者、母親となる）は捉えているのであろうか。更に、言語発達に関する知識を得る前と後では意識の上で変化がみられるのであろうか。講義担当としてその点を探り、もし差が出るとすれば、どのような意識的变化があるのかを知り、今後の講義法の参考としたい。

2. 幼児の文字獲得が早期化すれば、系統だった指導法が確立されておらず、適切な教材開発も進んでいない状況下で、文字指導の知識の浅い保育者、母親などに自己流の指導を受けたり、又我流で幼児が文字を習得した場合、不適切な習慣が残る可能性がある。本学々生（20才前後）に残っているそのような習慣を調査し、幼児の文字指導で注意しなければならない点を探りたい。

III 方 法

本学保育科学生へのアンケート調査

〔内容〕

- (1) 幼児期の文字指導はどのような方法が望ましいか（指導者、方法、場所）
- (2) 書き方についての自己分析、（筆順、筆記具の扱い方、利き手）

(3) 統制群として、千葉県K市（東京のベッドタウン地）の私立幼稚園在園中の幼児を持つ母親に(1)と同質問をする。更に母親を通して、幼児の文字獲得上の実態を調査し、学生の結果の判断資料とする。

〔対象人数〕

- (1) 駒沢女子短期大学保育科在学中の1・2年生 計 262名
- (2) 母親83名（4・5才の幼稚園児の母）

〔期間〕

平成元年9月～11月

※なおアンケート内容の詳細は、重複を避けるため、結果項目にて順次紹介することとする。

IV 結 果

結果1.

まず「幼児の文字指導は、どのような形でなされることが望ましいか」という設問につき選択肢を5項目に分け読みと書き、それぞれ該当個所を選んでもらった結果は、下記の通りであった。（表1・2、図1・2）

(1)「園での一斉指導が望ましい」とするもの。

「読み」について……1年生では、2割近い支持であるが、2年生では1割を切っている。

「書き」について……支持者は全体に低下するが、順位は「読み」と変わらない。2年生の支持が1年生より低いということは、常々、保育科の講義や実習の体験から意識の変化が起ってくることを示唆できよう。母親群では、特に読みの指導の支持が多い。

(2)「園で興味・関心のある子には、きちんと個別指導する事が望ましい」とするもの。

2年生の3人にひとりの支持があった。母親の支持が低いのは、現状で期待することの困難を在園中の園を通して感じてのことと思われる。

(3)「教師は尋ねられた時、答える程度でよい」とするもの。

「読み」「書き」共に1年生の支持が、母親・2年生に比較して低い。1年生のこの点についてのコメントで意向を探ると、「幼児期は元気に遊ぶ時期であり、文字の指導は学校教育ですれば良い」「興味のある子には、

(表1)

「読み」の指導について	保 育 科 学 生			幼稚園児の母親
	1年生	2年生	計	
1. 園で一斉に指導した方が良い	19.6%(28)人	9.2%(11)人	14.9%(39)人	28.9%(24)人
2. 園では興味・関心のある子に個別指導	23.8 (34)	31.2 (37)	27.1 (71)	14.8 (14)
3. 尋ねられた時教師は教えれば良い	16.8 (24)	45.4 (54)	29.8 (78)	45.8 (38)
4. 家庭において、きちんと指導すべき	37.1 (53)	11.7 (14)	25.6 (67)	6.0 (5)
5. 幼児期の指導は必要なし(就学後)	2.8 (4)	2.5 (3)	2.7 (7)	2.4 (2)

学生262名（1年…143名 2年…119名） 母親83名

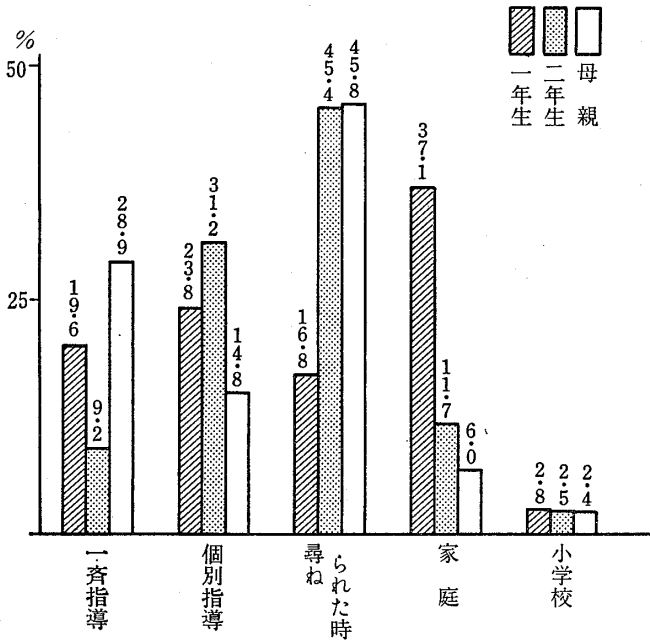
(表2)

「書き」の指導について	保 育 科 学 生			幼稚園児の母親
	1年生	2年生	計	
1. 園で一斉に指導した方が良い	10.5%(15)人	6.5%(7)人	8.8%(22)人	15.0%(12)人
2. 園では、興味・関心のある子に個別指導	26.6 (38)	32.4 (35)	29.1 (73)	18.8 (15)
3. 尋ねられた時、教師は教えれば良い	11.9 (17)	30.6 (33)	19.9 (50)	51.3 (41)
4. 家庭においてきちんと指導すべき	30.1 (43)	13.0 (14)	22.7 (57)	1.3 (1)
5. 幼児期の指導は必要なし(就学後)	21.0 (30)	17.6 (19)	19.5 (49)	13.8 (11)

学生251名（1年…143名 2年…108名） 母親80名

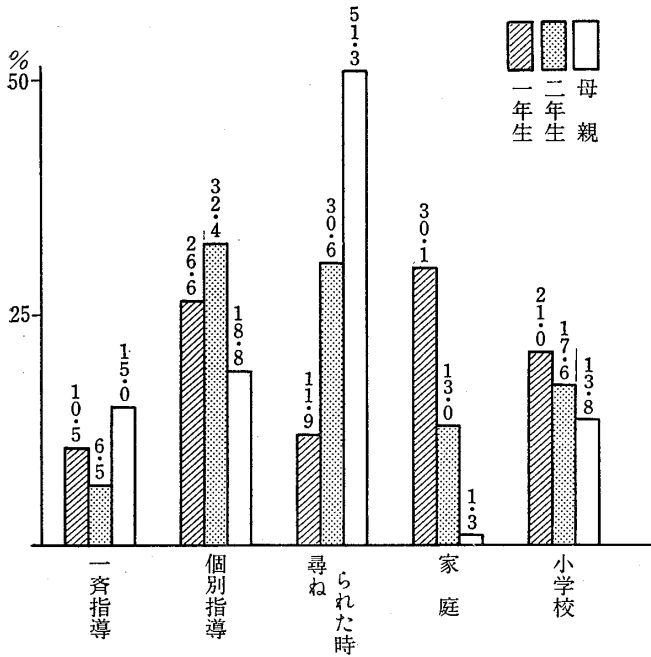
「読み」の指導について

図 1



「書き」の指導について

図 2



家庭で指導すれば良いのでは」といったものが多かった。幼児の実態をまだ良く知らない1年生が、理想論に走る傾向が顕著である。

2年生の「読み」についての支持は、母親とほぼ同数、2人にひとり弱の割合で支持者が多い。ただし「書き」の指導では、減少がみられる。

(4)「家庭できちんと指導すべきである」とするもの。

1年生では、「読み」「書き」共に3人にひとりの割合で支持者が多い。ここで面白いのは、当の母親達は支持率が非常に低いことである。実際に子育てする中で、家庭での指導に限界を感じている結果といえよう。家庭での指導上、不安や悩みがあれば記入してほしいという自由記述設問に対し、「筆順の誤りを直そうとしない」「文字が慣れると乱雑になる」「鏡文字が多い」など主に「書き」の指導に関する悩みが多く、1.3%の支持率によく表れている。なお2年生では、その点を講義の中で話してあったため、支持率が低かったとみて良いであろう。

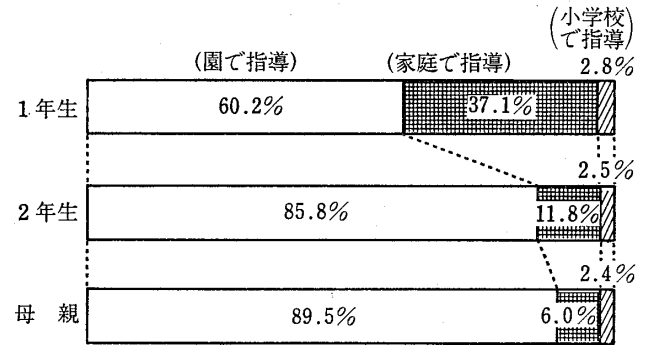
(5)「園での指導は必要ない。就学後一斉に指導すればよい」とするもの。

「読み」においては、もはやその時期は過ぎていていると感じてか支持者はいずれも2%台である。しかし「書き」については、指導の系統制と学習という形が望ましいと思われるのか全体に「読み」の率より支持は高い。

設問1～3は、指導内容の差こそあれ園での指導についてである。それ等をまとめ積極的であれ、消極的であれ園での指導を望ましいとするものを、家庭・学校での指導支持率と比較してみた。(図3・4)

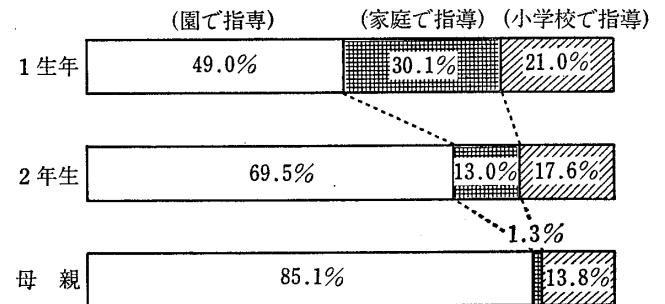
「読み」の指導

図 3



「書き」の指導

図 4



これを見ると3者の意識差がよくわかる。特に2年生の意識は、1年生より母親の意識に近づく傾向がみられ、筆者にとって意外であった。

結果 2.

「書き」の獲得上問題となる筆順、筆記具の持ち方、利き手の3点につき、調査した結果は下記の通りである。

鏡文字や乱雑さは、発達途上で修正されるが上記3点は修正が困難で獲得期の状態が成人まで残ると仮定して行った。

(1) 筆順について

設問としては、「ひらがな筆順のうち、誤りがあるとわかっていながら直していない文字があるか」を尋ね、「ある」と回答した学生には、「どの文字で、どう書くのか」を尋ねた。結果は表3の通り、17.5%の学生に筆順の誤りがあった。

(筆順について) (表3)

筆順の誤りはない	82.5% (222人)
筆順に誤りがある	17.5% (47人)

(保育科1・2年)

誤まって書いている文字は、も……25名 や……12名 よ……2名 さ・き・な・ら・ん……各1名である。

(1名で2文字以上の誤りを含む。未記入……3名)

又、「筆順は大切と思うか」という設問に対しては表4の結果である。

(筆順は大切と思うか) (表4)

思う	59.7% (160人)
どちらともいえない	35.4% (95人)
思わない	4.9% (13人)

(保育科1・2年)

理由としては

[大切と思う理由] (多い順)

- ・筆順は形に影響する (きれい・美しい)
- ・それなりに理由があるから
- ・毛筆で書く時必要
- ・伝統・文化として守りたい
- ・大人になって恥をかく
- ・書きやすい
- ・小学校で筆順のテストがあるから
- ・後から直しにくい

[どちらともいえない]

- ・書きやすければ気にしなくても良いのでは

- ・字の意味が変わるわけではない
- ・習慣化したものは無理に直さなくても良い
- ・筆順通りでない方が書きやすい字もある

[大切とは思わない]

- ・文字の形が変わらなければ良い
 - ・書いてしまえば同じ
 - ・読めれば良い
- などの意見があった。

「どちらともいえない」と答えたものは、全ての文字のことではなく、幾つかのすでに習慣化した文字についてのことのようなのだ。全体的には、筆順は必要と認めているとみて良いと思われる。

(2) 筆記具の持ち方について

「筆記具の持ち方を自分で正しいと思うか」と尋ねた結果は表5に示す通りである。

(筆記具の持ち方について) (表5)

筆記具の持ち方が正しい	42.5% (114人)
筆記具の持ち方が正しくない	57.5% (154人)

(保育科1・2年)

全学生の半数以上が誤まっていると知りつゝ書いているわけである。

又、「どのような持ち方をしているのか」と尋ねた結果は表6の通りである。

(筆記具の持ち方の誤り…自己分析) (表6)

1. 親指が筆記具を握る持ち方……	20.8% (25人)
2. 親指の先が筆記具に触れず人差指にかかる持ち方……	34.2% (41人)
3. 筆記具をコントロールする指先が人差指と親指でずれのある持ち方……	22.5% (27人)
4. その他……	22.5% (27人)

親指の握り方に問題のある者が全体の半数以上である。「その他」に該当する者には図示して説明させたが、中には首を傾げたくするような持ち方がいくつかあった。なお今回の集計からは外したが、誤りがないと回答しながら、表6の1～3に該当する持ち方をしている学生が数人いた。自分の持ち方が誤まっていることさえ気づいていない学生もいることがわかった。

(3) 利き手について

筆記具を持つ手は、右・左・両手のいずれかを尋ねた

結果、左利きは269名中、7名であった。両手で同じように書ける者は1名、筆記具のみ右で箸や鉄は左の者が4名であった。左利きで不利な点を該当者に尋ねた結果は、下記の通りである。

- 横書きが苦手
- 英語のスペリングが書きにくい
- 手が汚れやすい（インクなどで）
- 右利きの人より努力しなければならない
- ギッチョと子どもの頃笑われた
- 紙を斜めにして書かなければならない
- 姿勢が悪くなる
- 保育者となった時困る

又、両手や筆記具のみ右の者は、幼稚園や家庭で厳しく矯正された結果と記している。

V 結 論

学生達の文字指導についての意識は、指導の中心を園と自覚している面が大きいことがわかる。ただし指導方法については、意見がわかれ、幼稚園や保育園での実状と同じく戸惑いがみられる。ただ、1年生に家庭での指導を期待する率が高いのは注目される。しかし、今後の学習や実習などにより変化するものと思われる。一斉指導の問題点を予想できる2年生では、さすがに一斉指導の支持者が少ない。特に園での「書き」の一斉指導には抵抗を感じているようで支持率は低い。

文字ことばの構造や子どもの実態を理解することは学生の意識に変化が起り、それも適切な判断に近づくことがある程度予想できるのではないかと思う。

次に「書き」に伴う問題点の調査では、今回筆順、持ち方、利き手の3点に絞ったのであるが、その誤りを比較してみると表7の通りである。持ち方が一番獲得期の習慣を残すといえよう。このことは、今後幼児の指導上の留意点として大変参考となった。

(表7)

筆順の誤り	17.5%
持ち方の誤り	57.5%
左利き	2.6%

(各269名中の割合)

又、鏡文字や特殊助詞・不規則音表記などの誤りが彼女達にも幼児期にはあったと思われるがそれ等は完全に矯正され、或いは自己訂正がなされている。ちなみに、母親のアンケート結果では83名中38名が自分の子どもについて現段階における文字獲得上の問題傾向を示唆して

いる。(表8)

(文字獲得上心配なこと)

(表8)

筆順	14人
左利き	6
持ち方	6
鏡文字	5
不規則音の書き方	2
書き方が乱雑	2
発音したままを文字化する	1
片仮名・漢字も覚えてがる	1
文字に興味がない	1

(幼児の母親)

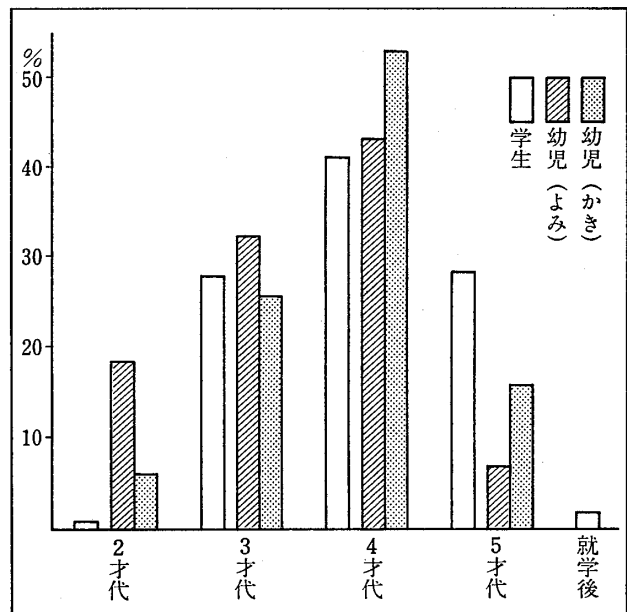
文字獲得は、早期化するほど、自己学習の傾向が大きくなり、又周囲も誤りがあっても、「まだ小さいから」と放っておくことも多いであろう。しかし早期化は、幼児後期や児童期とは違った問題点を発生させる。指導法や教材も変えていかねばならない。事実、学生と幼児の獲得期の比較(表9、図5)からも、早急な対応を必要とすることがうかがえよう。

(初めて文字に興味・関心を持ち始めた年齢) (表9)

		年令					
		2才代	3才代	4才代	5才代	就学後	未
学 生		0.4% (1人)	27.7% (69人)	41.8% (104人)	28.1% (70人)	2.0% (5人)	
	読み	18.2% (16人)	31.8% (28人)	43.2% (38人)	6.8% (6人)	0	0
幼 児	書き	5.3% (4人)	25.3% (19人)	53.3% (40人)	16.0% (12人)	0	0

(初めて文字に興味・関心を持ち始めた年齢)

図5



子どもの自発的・文字獲得を止めることは不可能である。しかし早期化への対応は保育界では無視、あるいは放置されている。是非論も結こうだが、止められない早期化傾向に何らかの手を打つことも切迫した問題といえよう。

Ⅵ 考 察

幼児の文字指導に関する統一見解が出ず、指導法が足踏み状態を続ける理由は色々あるが、特に下記3点に基因する面が強いと思われる。

まず第一に、幼児教育では実体験を通し、自ら考え、感じるなど、より基本となる発達を重視すべきであり、文字の獲得により基礎的発達が疎かになるのではないかと、といった危惧である。次に、文字指導が一斉保育に流れ、新教育要領のねらいである個を重視し、自発性を促す教育目標から外れる危険性を憂慮してのことであろう。第3には、保育者養成の問題で、現状では幼児の文字指導について学ぶ機会がないため、自己流で幼児に指導される危険性があるからである。

今井氏(注1)が幼児期の文字指導に対する代表的見解を5つに分けているのでそれを基に検討してみたい。

(1) 慎重論

幼児期は、園の生活や家庭生活の中で、文字への関心を持たせ、親しませることを目的とし、そのための環境設定を重視するが、読み方や書き方の直接指導はしないという考え方。

(2) 肯定論

就学前の幼児のほとんどが、ある程度の読み書きの能力を備えている時代だから、ある程度の文字学習はさせておきたいという考え方。

(3) 必要論

幼児の学習意欲と知的水準に合致する限り、彼らの言語能力を高めるための文字指導は、むしろ必要であるという考え方。

(4) 積極論

幼児の豊かな才能を開発するための手段として、できるだけ早期に文字指導を推進させることこそ重要であるという考え方。

(5) 否定論

文字の学習は小学校に入学してからでよい。幼児期に文字を指導することは、知的偏重になるばかりか、他の活動や学習を阻害し、ひいては幼児の人格の全面的発達を阻害するという考え方。

以上のような論議はまさしく現場にも反映している。

表10は昭和59年に幼稚園教育要領の改訂を前にして「幼稚園教育要領に関する調査研究協議者会議」の検討に資するための資料を得ることを目的に全国から無作為抽出された幼稚園の「文字の取り扱い」に関する回答である。この回答から見ると(1)の慎重論に該当する現場が多いようであるが、文字に対する興味や関心が育つ「環境」を整えるとはどの程度でどのような方法のことかとなるとかなり園による差が出てくるであろう。

(文字の取り扱い)

(表10)

	幼稚園数	%
1. 文字に関する指導は全くしていない	11	1.7
2. いろいろな経験や活動の中で文字に対する興味や関心が育つよう環境を整えている	470	72.0
3. 興味や関心の高まった幼児には個別に文字の指導をしている	22	3.4
4. 全員に文字の一斉指導をしている	83	12.7
5. その他	24	3.7
NA	43	6.6

同調査で、幼稚園終了時点での幼児の文字との関わり合いについても調査されているが(表11)、ここにも子ども側の現実と園の対応にズレが感じられる。

(文字に興味や関心がある)

(表11)

	幼稚園数	%
1. ほぼ全員の幼児	567	86.8
2. 半数程度の幼児	77	11.8
3. ほとんどいない	1	0.2
4. わからない	0	0.0
NA	8	1.2

(幼稚園終了時点)

先の今井氏はこのような子ども側の切迫した事態を次のように述べている。(注2)

(a) 幼児はすでに4才代から文字を意図的に学習し始め、その習得は就学まで継続されている。

(b) 幼児期における文字習得の活動は、年を追って拡大し、既に幼児が自力で正しく学習できる範囲を超えて、教師や大人の適切な指導を必要とする分野まで拡大している。

(c) 大人の指導がなくても十分に文字の習得ができる子どもと、援助なしには十分な習得のできない子どもと

の間に、著しい個人差が生じてきている。

以上、a, b, cで述べられていることは、個人の意見というより多くのデータが証明している事実である。

さて、筆者自身の持論は、たとえば今井氏の分類に位置づけるとすれば、(3)の必要論に近い。ただしカリキュラムとして、日案や週案に位置づけることは反対である。個々の子どもが文字の読み書きに興味を示し始めた時、その子どもに適切な指導がなされることが何よりも大切だと思うのである。その為には文字指導のマニュアルが必要であり、それに従い教材開発を進めねばならない。しかしこの主張は現在まだ一般的には通用しない。その理由は次の2点による。

(1) 文字獲得のレディネス期の幼児が意欲を持って取り組むための教材と系統的指導法が確立していないこと。

文字に興味・関心を持たせるあそびや活動の指導法は多くみられるが、その後どうするのが完全に抜けている。

(2) 興味・関心を示した子どもにもし個別に指導するとしても、その他の活動中の子どもをどうするのか、の見解が考えられていない。クラス全体の幼児が文字に限らずそれぞれ個別活動可能な方法を取らなければ、文字指導のみ遊離してしまうであろう。

子どもが主体的に取り組める環境構成は抜本的改革ではアンバランスになってしまう。つまり、幼児教育における保育活動の全てを個別化した時始めて文字指導も無理のない自然な形となる。

理想に反し、現実的に日本中の幼稚園や保育所で画一的な保育を取り除くことが可能となるにはかなりの時間と意識改革を必要とする。

しかし、先にも述べた通り、切迫した事情は早急な方策を要する。筆者は(1)の問題につき、十数年研究をすすめて来たのであるが、その解決策を独自に見出している。その紹介は今回、省略し、別に機会を持ちたいと思う。(1)の問題の見通しができて来たからこそ、必要論に近い見解を取るのである。

次に(2)についてであるが、欧米諸国では当り前の個別活動が、我が国では逆に特別の活動のように見られ、一斉保育をしないと保育ではないような一般的意識を改革することは、簡単なことではない。良識ある保育者が現場で取り組み、1園ずつでも広げていくしかないであろうが、そう遠くない年月のうちに保育改革が起ることは間違いないと思われる。子どもの主体的、自発的活動を全面的に信じ、そのための保育法確立のための研究を今後も続けていくつもりである。

今回の調査もその為の実証的研究をより深めたいための一方面からの追求であった。

引用文献

(注1) 子どもの言語心理2 (幼児のことば) 福沢周亮編 大日本図書 1987 p.85

(注2) 前掲 p.87

参考文献

- 幼児の文字教育 しおみとしゆき 大月書店 1986
- 全日私幼連要覧 全日本私立幼稚園連盟 1987
- 幼児の読み書き能力 国立国語研究所 東京書籍 1980
- 言語発達診断検査 田中教育研究所 田研出版 1980